

## 【第二回つばきの国俳句大賞】

2019年2月11日～17日、国重要文化財・萬翠荘で、伊予つばき協会主催による「第四十三回つばき名花展」が開かれた。昨年創設された「つばきの国俳句大賞」で「椿を題材とした俳句」が募集され、101句の応募があった。選者は、八木健、山口聰（伊予つばき協会会長）、小泉和子（同理事）で、最終日に結果発表と表彰があった。副賞として、大賞と優秀賞三点の俳句を八木健がアートにして贈呈し、椿の苗木や、道後の入浴券のセットも贈られた。

大賞は「何か言ひたげ椿の開き具合（日根野聖子）」。八木健賞は「泣きべそをかくまったのは藪椿（桑田愛子）」。伊予つばき協会会長賞は「うすべにのえがおにたくしゆめほのか（古野健司）」。伊予つばき協会賞は「蕾には固い意思あり白椿（坂本淳子）」。大賞の句は擬人化の句だが、椿の花びらを唇に見立てて写生しているところが巧みである。八木健賞は、物語性があり、読者の想像を引き出す力がある。佳作にもオリジナリティーに富む句が多く、今後、益々の発展が期待できる。

佳作	白椿子の朝稽古凜として	梅野光子
	棘隠す事を覚えて寒椿	上山美穂
	大椿黄色き雌蕊蜂誘う	岡田廣江
	椿展壺中天なる笑顔かな	脇塚耀子
	老若かき分けて見る椿かな	八木千恵美
	椿展番付表の面白き	渡部愛子
	人ごゑも水音も遠し藪椿	高橋佐和子
	登りきてすう一息に椿の香	仙波志津枝
	一つづつよう咲いたねと声かける	櫻木美千代
	濃き大輪主張かもしぬ紅椿	源 由佳
	白椿芯の芯まで真白なり	梅岡ちとせ
	晩年の夢よ椿の一重八重	小原恵美子
	温泉の街のひなの夢てふ薄椿	佐賀 博
	どっさりと両手に椿買ひにけり	久我正明
	屋敷神に頭を垂れる寒椿	源のぶ子
	石鎚てふ大きな赤にみせられて	大政こず枝
	薄桃の椿に魅せられ萬翠荘	松内世子
	角度かえまた角度かえ椿撮る	高橋 洋
	思ひがけず触れなば落ちる椿かな	小林明美
	紅椿見知らぬ人と花談議	矢野寿美子

